短　歌　（二）

下田　明美

絹さやの白い花びら坪庭に
　ひらひらと舞う蝶ちょう擬(もど)き

海棠のピンクの花びら色褪せぬ
　飾りとなりて私を誘う

雨樋を登ったアケビたくさんの
　花を咲かせた　古代紫(むらさき)

スズランの小さな花が揺れている
　鐘が聞こえる、空耳(そらみみ)かしら

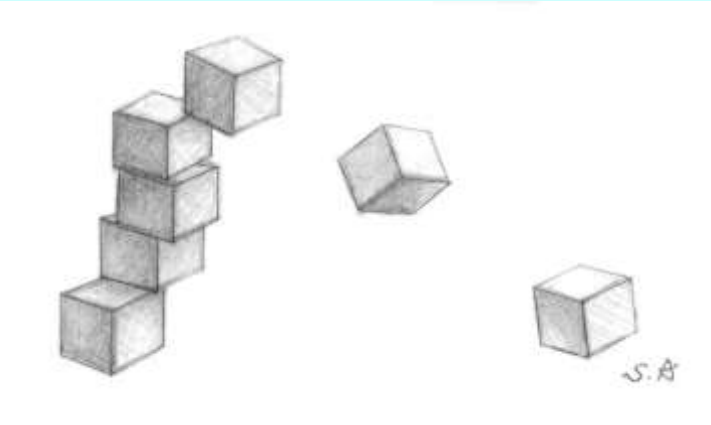
休む間を惜しむかのよう囀(さえず)りが
　日なが一日、　鳥たちの恋

降り続く雨の重みか紫陽花は
　あちらこちらで俯いている

花びらは淡き色より濃くなりて
　移ろいてゆく露の紫陽花

ギックリと腰を痛めて居られない
　立っても、寝ても、座ってみても

腰椎の第四番目のレントゲン
　私の骨が遊泳している

立てば良い、ただ立つだけで良いのだが
　腰痛あれば　難行苦行

ボランティア、自分のためにするのだと
　言い募る人、自信がないのね
パソコンは人を見るからオーナーの
　クリックしない仕事も熟(こな)す
酔うほどに前頭葉が動きだし
　傷のみ伝える異常なシナプス
例えれば水を吸わないスポンジは
　唾液の出ない加齢の口腔(こうくう)
幾時か眠りに落ちただけなのに
　目覚めの朝は　いつも迷い児